

## 選評

桑原夏子

### ラクイラ近郊フォッサ、サンタ・マリア・アド・クリプタス聖堂北壁装飾研究 —聖母晩年伝図像を手がかりに—

本論文はイタリア、アブルッツォ州ラクイラ近郊の小村フォッサにあるサンタ・マリア・アド・クリプタス聖堂北壁に残る十四世紀の壁画を対象とし、その壁画の様式分析、作者の推定、図像分析を行い、当該作品を含むいくつかの現存作例のモデルと考えられる失われた作品の存在をも想定している。本論文の考察は、イタリアにおける聖母晩年伝図像の生成と発展という、より包括的な検討へつながるものと考えられる。

本論文は五つの章からなる。まず1章において、サンタ・マリア・アド・クリプタス聖堂北壁装飾全体の記述の後、注文主が一四三五年まで同地を支配したアンジュー家につながる者との推定がなされる。

2章では作者の推定がなされる。筆者は、トスカーナの画家に帰す大方の先行研究を否定し、当該作品の様式が十四世紀のラクイラにおける主要画家である「フォッサの画家」、「カンポ・ディ・ジョーヴェの画家」とは異なり、ウンブリア地方のオルヴィエート大聖堂内陣壁画の作者ウゴリーノ・ディ・プレーテ・イラーリオに近いことから、その影響下にある画家の手に帰している。

3章及び4章においては図像分析がなされる。当該作品の主題である聖母晩年伝の図像は一般に『黄金伝説』を典拠とするが、当該作品はその記述と一致しない。この特異な図像はスポレートの一三九〇年頃の例、パドヴァの一三二〇年頃の例、一三八四年頃のオルヴィエート大聖堂内陣壁画から部分的に引用されたものであることが指摘され、同時に、そこから制作年代が一三八四年以後とされる。

フォッサと同様な聖母晩年伝図像を表す例として、オッタヴィアーノ・ネッリによる二点とモンツァ大聖堂附属美術館所蔵の祭壇衝立が挙げられる。制作地、制作年代を異にするこれらの作品が相互にきわめて類似していることから、その要因として共通のモデルの存在が想定され、それがマッテオ・ジョヴァンネッティのヴァチカン宮殿の壁画(逸失)であるとの仮説が示される。マッテオは一三六〇年代にヴァチカンで制作しており、その際、すでに一三四〇年代にアヴィニョン教皇館で制作したと推測されるものと同様な聖母晩年伝を描いたと筆者は推察する。

5章においては、墓碑の検討を通じて聖母晩年伝が最後の審判と関係づけられ、死後の復活と平安への願いと関連していたとされる。当該作品における壁面下部の横臥像は墓碑における死者と対応するものであり、この横臥像が死後の注文主が復活しつつある姿であると主張される。

本論文においては、美術の中心から離れた周縁の地の、無名の画家による無名の作品を取り上げ、緻密な様式分析と作例の調査によって制作年代と作者を推定し、合わせて失われたモデルの想定にまで及んでいる。さらに聖母晩年伝が最後の審判との関係から死後の復活への願いとも関連していたことが示される。その論述は生彩に富み、大胆な仮説の提示と相俟って刺激的であり、十四世紀イタリア美術の研究に一石を投じたものと言える。以上の理由により、桑原夏子氏に『美術史』論文賞を贈り、その功績を称えるものとする。